

目的 被服の着用動機となる色彩の重要性はよく知られているが、その中には配色面で必要となる図と地の関係、すなわち面積効果も着用者の美的効果を高める上で大きな影響を与えている。この観点から面積比の異なる縞柄をとりあげ、2色配色を施し、人体に着用した場合の立体的な見えが、どのようなイメージ変化をもたらすかを検討した。

方法 着用時の縞幅を0.7 cmとし、面積比は縞と地の割合が1:1, 1:3, 1:5, 1:7, 1:10の5種を選出した。これを縦方向に用い、半袖、衿なしのベーシックワンピースを製作しモデル1名に着用させた。実験はカラーシミュレータを使用し、縞と地に赤、黄、緑、青、紫、白のすべての2色配色を施しカラースライドを作成した。判定は、スクリーン上の映像を16の形容詞対を用いて5段階評価し、因子分析を行いイメージを求めた。さらに分散分析、要因分析により面積比と縞と地の2色によるイメージへの影響を明らかにした。

結果 因子分析の結果、被服における縞柄の面積効果は評価、目立ち、背を高く見せる、柔らかさの4因子で表された。各因子に及ぼす面積比と配色の効果は、両者共に関与し、特に面積比は背を高く見せる因子に、配色は評価の因子に影響が大きい。要因分析の結果、評価の因子には面積比1:10が最も因子を高める効果があり、ついで1:7, 1:5の順となる。縞と地の色は青と白の配色が作用する。目立ちの因子にはいずれの面積比に対して地が赤や黄との配色、背を高く見せる因子には1:1, 1:3など面積比の小さい縞で白と青の配色が作用する。また、柔らかさの因子には1:1で赤と黄の配色が影響することが認められた。以上のように面積比は配色と同様、重要な役割を果たすことが明らかとなった。